

感性を活用した風景の眺め方に関する研究 ～風景道の実践～

Experimental research about the road scene which utilized sensitivity engineering

東京工業大学 正員 桑子 敏雄(Toshio Kuwako)
北海道開発局 ○正員 井出 康郎(Yasuro Ide)
北海道開発土木研究所 正員 三原 慎弘(Norihiro Mihara)
㈱ジオスケープ 正員 須田 清隆(Kiyotaka Suda)
㈱オーベック 正員 大庭 将宣(Masayoshi Ooba)

1. はじめに

わが国では、世界でも例を見ない速さで、少子・高齢化の進行が進んでいます。特に、地方はその傾向が顕著であり地域社会崩壊の危機に面していると言っても過言ではなく、生き残りのための地域再生の議論が盛んに行われています。そのとき、地域の大きな課題として挙げられるのは、人口減少と高齢化により地域の生産活動の低下とともに、地域住民自体の自信喪失感も考えられます。地域の誇りや希望、生き甲斐等を地域の人々が保持するためには、地域の魅力を発見する手立てが必要になっています。地域の持つ風土、歴史、文化やローカル・アイデンティティを、風景に融合させることで、表情の豊かな風景の形成に繋がると考えています。この表情の豊かさを表す『風景』は、地域の魅力でもあり、個性になるものと思われま

2. 風景の判断に影響する感性情報

風景の評価は、実際の視点場からの視覚情報に対して、個々の人の価値観や経験に照らし合わせて、風景の良し悪し等を判断しているものと考えられます。

しかし、個人の価値観は、現在までの体験の違いや知的情報量において個人差があることから、共通な風景の評価を難しくしています。これは、人間の風景に対する感じ方が、単純に言葉や映像で表現ができないほど、あいまいでかつ、複雑であることから考えると考えます。本研究の目的は、人間の視覚から受けるイメージ形成過程にて、風景の持つ意味や価値に対して、知覚を始めとする感性情報を与えることによって、風景の魅力や味わい方等の評価の仕方に関して検討するものです。

3. 風景を感じる作法（風景道）

風景を感じるには、見るだけの視覚的な観点からだけでなく、聞く・嗅ぐ・味わう・触れるという人間の五感を刺激して、さらに、その風景の背景にある歴史・文化といった空間の履歴¹⁾を理解しながら、風景に向かい合うことが重要になると考えています。ここでは、風景からその地域の風土や文化や歴史を感じ取る作法として、風景の眺め方を極める道を意味する『風景道』について提案しています。

風景道とは、地域の魅力について、誰かに話したくなる欲求探しであり、『地域の個性』を理解する手続きとを考えます。その結果、誰かに話したくなる欲求の形成が実現して、地域の個性を内外へ発信するきっかけとなり、

外の人に魅力を伝えることになると考えます。それが地域にとっても刺激になり、そこに住む人々に自信と誇りを芽生えさせ、地域の活力に繋がっていきます。地域の活力は、その地域の人々が主体的かつ自主的に取り組んで、初めて地に足の着いたものになると考えます。このためには、地域の人たちの気持ちを一つにする工夫が必要になります。この工夫の一つとして、風景道として、極意 17 か条を提案しています。

風景道極意十七ヶ条

風景道宗匠 生野忠道

- 一 風景を聞こう
- 二 風景に触ろう
- 三 風景を嗅ごう
- 四 風景を味わおう
- 五 風景を知ろう
- 六 要するに、感性を動員して風景を体感しよう
- 七 そのうえで、風景を見よう
- 八 風景の点、風景の線、風景の面をたどろう
- 九 風景の奥行きを考え、装をたどり、趣きをつかもう
- 十 風景のなかにいる自分を意識しよう
- 十一 風景なかに生きるよろこびをもとう
- 十二 道をたずねて、ひとびとの表情を読み取ろう
- 十三 風景にふさわしい道づくりをみんなで考えよう
- 十四 風景のなかで残すもの、変えるもの、つくるものを論（あげつら）おう（視点の共有、視線のにぎわい）
- 十五 よその真似はやめよう
- 十六 風景をだいなしにするもの、見苦しいもの、センスのないものをつくることだけはやめよう
- 十七 風景の道をみんなで育てよう

4. 現地実験

風景道を検証するための現地実験を、地球の輪郭を映し出す水平線と天塩山脈の稜線がなすスカイラインから創出されるスケールの大きい景観を有する日本海オロロンライン（約 315km）沿いについて、H17 年 10 月に行いました。実験では、事前調査で抽出した調査対象地（風景）について、文化や歴史等の知的情報を実験者に与えながら、ルート沿いに、個々の風景の繋がりを現地で確認するとともに、それぞれの風景の意味について、実験参加者（6 名）で議論を行いました。

■1日目(往路)ルート

小樽市(銭函 R5, R337 合流点付近) 出発～石狩市(灯台・番屋)～石狩市浜益区(千年ナラ)～増毛町(JR 増毛駅, 商店丸一本間家, 観光協会の建物, 厳島神社, 元陣屋(文化交流施設), 増毛小学校)～初山別村(真つ暗と星空)～豊富町(豊富温泉泊: 油温泉)



石狩浜



石狩灯台



浜益村眺望



増毛の町並み



厳島神社



羽幌の夕陽

写真-1 事前調査における風景(往路の例)

■2日目(復路)ルート

豊富町～サロベツ原野～稚内市(宗谷岬)～幌延町(金田心象書道美術館)～天塩町(天塩川、天塩川歴史資料館)～遠別町(世界北限の稲作)～初山別村(しょさんべつ海牛の化石)～羽幌町～苫前町(古代の里)～小平町(北創窯)～留萌市(波濤)



書道美術館



歴史資料館



海牛の化石



古代の里



北創窯



留萌港

写真-2 事前調査における風景(復路の例)

5. 現地実験での検証

(1) 石狩浜の検証

遠くから曇り空のため海が薄黒くうねる状態を視覚で感じた場合と、実際に波打ち際に近づき五感を使って、波の音を感じ、波際で海水に触れ、少し舐めてみて、ライトバンで売っていた地元の海産加工物を覗き、その加工方法に昔ながらの工夫があることを聞き、改めてそれを味わうと、石狩浜のイメージに新たな魅力が印象付けられた。

(2) 増毛厳島神社の検証

視覚的には、神社の鳥居のみの印象が強いが、道内唯一の総透し彫りがある社殿を眺め、社殿にある奉納物を読み、社殿に直接触れ、五神が合祀されている増毛厳島神社と地域の関わりを理解し、北前船がもたらした増毛の文化と豊かさなど、神社と海との空間にあった過去からの履歴を推し量ることにより、地域に対する興味を深めていくことができた。その結果、神社の風景を通して旧本間家や北前船が持ち運んだ湧水など、他の地域資産

との結びつきを強くしたことで風景の持つ価値が高まっていた。



彫り物



唐様式の絵



奉納された連歌



雲龍の天井画



海を望む景観



神社の由来

写真-3 増毛厳島神社

(3) 天塩川の検証

視覚面から、南から暑寒別川、留萌川、羽幌川、天塩川とそれぞれ河川景観の表情の違いが感じられる。なかでも、天塩川では、川に近づき、流れの音や川の大きさを体感した。松浦武史郎の蝦夷地探検時の足取りや、風雪に耐えてきた100年以上の樹齢の赤松や、冬場には北から飛来する猛禽類のオジロワシ等が空を舞う姿を思い描くことにより、天塩川の表情の多様な豊かさを感じることが出来た。

6. 実験成果

現地実験を通して得られた成果を整理すると以下のとおりである。

- (1) 風景は、単純に「見る」という視覚的要素のみでなく、五感を通して感じることで、その空間の履歴を知ることにより興味が高まることが確認出来た。
- (2) 風景の見方として、「風景道」で定義した17か条の有効性が確認できた。

7. 最後に

地域の人が地域のために活動するには、自分の住んでいる地域が好きで、そこに住んでいることを誇りに思う気持ち(ローカルアイデンティティ)が必要になります。

自分の住んでいる町には、他にはない良さがある、都会では決して望めないこんないいものがある、・・・等々です。風景道とは、ただ漠然と見ていた当たり前の風景を意味ある空間に気付かせるためのツールであり、地域の人々にその地域に対する魅力意識を芽生えさせる実学として期待しています。また、風景道の実効性を高め、多くの人に地域の資産の魅力を拡げていくためにも、地域情報の共有ツールとして、ポータルサイトやHPなどの活用も必要と考えられます。

最後に、本調査においては留萌開発建設部、河川環境管理財団のご支援、ご協力を戴いたことに対し謝意を申し上げます。

【参考文献】

- 1) 桑子 敏雄(著): 感性の哲学 (NHK ブックス)